

【論文提出者】 社会文化科学研究科 人間・社会科学専攻 フィールドリサーチ領域
木村 亜希子

【論文題目】
現代農山村における結婚に関する研究

【授与する学位の種類】 博士（学術）

【論文審査の結果の要旨】

本論文『現代農山村における結婚に関する研究』は、現代農山村の結婚状況、特に男性における未婚者の増加と中年層への拡大化を分析することを通じて、農山村の小規模集落の維持・存続を検討した意欲的な論考である。単なる農山村の配偶者選択を軸にした結婚難問題を扱うのではなく、結婚という社会的行動に焦点を当てて、豊富なフィールドワークに基づく調査事例を駆使した実証的手法でもって、現代農山村の現状分析と将来展望にまで言及している。

氏は、農村社会学の文献研究の中から「生活婚」という概念を再設定し、本論全体を貫いた分析概念としている。「生活婚」とは「生活を維持して去るに結婚すること、生活拠点を形成するに結婚すること」と定義され、結婚によって、①個人レベルの衣食住が充足される、②集団レベルでの成員の再生産が出来る、そして、③家族員の小経営体としての要件が充足されると考えている。1970年頃までは、この3機能要件を持つ「生活婚」が、人々の結婚の原理に強く息づいていた。しかし1980年頃から、生活婚の3要件が生活手段の外部化などにより分離し始め、特に、都市部では結婚の目標が、個人レベルでの配偶者の選択に収斂する「選択婚」的傾向が強くなったという。別言すれば、結婚がゴールとなり、結婚後の生活設計が遠く状況が発生した。この結果、集団レベルでの家産や家の継承および農業就労などの長期の生活設計を重視する農山村男性は、「選択婚」に馴染みにくく、未婚者の増加や中年層への拡大化が発生していると分析している。

この知見は、従来の社会学界、特に家族社会学での「農山村男性の未婚は、ジェンダー意識の近代化が出来ていない遅れた人々」と言う通説とは異なった見解であり、同時により問題点を掘り下げ、現代農山村の持つ本質的課題へと繋がる新しい知見である。

氏は、さらにこの「生活婚」の成立が、今後の農山村の家と集落の維持存続と深く連関していくことを、第4章・第5章での各地の事例調査を通じて明にした。まず第4章では、農山村の独身男性の「生活構造」を分析することによって、なぜ独身でも農村で暮らしていけるのかを抽出して、そのメカニズムと問題点を指摘している。母親との同居により、個人レベルの衣食住は充足されているが、その課題は、時間的制限と将来の生活設計が非常に不安定であることを実証的に分析した。この農村独身男性の「生活構造」分析は、従来の農村研究ではほとんど扱われていない領域であり、氏が先鞭をつけた独創的領域である。第5章では、未婚男性の多い集落と少ない集落を比較検討し、A<人口・世帯構成>、B<農業経営・複業>、C<移動能力・他出子のサポート>の3つの集落維持要件と、壮年男性の結婚状況が有機的に連関していることを明らかにした。また、今後の農山村の維持・存続にとって、結婚の有無が非常に大きな要件になることを指摘した。

以上の論文に対して、審査委員からは、「生活婚」概念の整理の不十分さや、都市部における未婚率の増加との比較検討が弱い等の指摘がなされた。しかし、本論文が従来、漠然と語られていた農山村の男性未婚者の増加と農山村の維持存続について、実証的データと「生活婚」概念の導入により、

理論的に農山村問題を深化させた功績は、学問的にも高く評価された。よって、本論文が熊本大学社会文化科学研究科の博士論文として適格であると判断した。

【最終試験の結果の要旨】

平成24年1月12日に行われた口述試験の結果、申請論文が学位を授与するに足る水準にあり、かつ十分な研究能力を有することが確認された。よって本委員会は、一致して、木村亜希子に博士（学術）の学位が授与されるに相応するものと判断した。

【審査委員会】

主査	徳野	貞雄
委員	牧野	厚史
委員	伊藤	洋典
委員	鈴木	桂樹
委員	中川	輝彦
委員	後藤	貴浩